特別寄稿

再び,「特性のない」ということについて

藤　井　　忠

若い頃に読んだきりになっている本を，何かの機会に取り出してきて読むことが最近ふえたように思う．そしてたいていは読み耽ってしまう．過去とのかかわりについては人それぞれに異なっているにしても，これは私だけのことではないであろう．

昔読んだ本を再び開いたとき，衝撃的なのは，ていねいに線が引いてあり，書込みまであるのに，読んだ覚えがないという場合である．それら線や書込みを他人のそれのように眺める．私の脳のどこかが欠けて，はずれていったような気がする．記憶の限界が，器質的欠落のイメージをともない意識される．と，ともに，記憶のエゴイズム，とでもいうべきものを覚える．体験のなかから，あるものだけを保持してゆく記憶の恣意性によって，いまの私ができているのであろうか．そして想起されてくるものがまったくない自分の部分，欠落して散っていった自分というものが不気味にも思える．

無論，一方では，ある場面やある言葉などに出会って，昔読んだ本が自然に頭に浮かんでくる場合があるし，また本棚のどこかで，本の背のタイトルを見て，一瞬，その本を読んだときのことなど蘇ってくるときもある．現物を持ち出して，見なおすということはせず，ただ記憶のなかに漠ととどまっていることを，しばらく思い浮かべている．近頃の再読は，たいていそういうもののなかで行なわれている．そして読み直すことで，かつて読んだことが修正されていく．ということは，いま読み直すのとはいくらか異なった仕方で，しかしおそらくはいま以上の熱をこめて読んだはずで，それがある形で私の内部に沈澱し，私の何かをつくってきているということにもなるのである．これとて不気味である．

カミユの『シジフォスの神話』もそのような本のひとつであった．あれはちょうど大学に入ったときで,「不条理」という言葉を言葉のまま呑みこむようにして読んだものが，以後，引っ越しを幾度か経ながらいつも棚の上のほうには置かれていた．たぶんカミユより先に読んだキルケゴールの『死にいたる病』や『反復』が同時に胸をかすめ，そうした自分の一時期を思う．あれかこれか，のなかで自分を追いこんでいこうとしていた頃のことを．カミユのあの本はあの頃の私の読み方のなかで私に強い作用を及ぼし，作用のほうはある形を保持しながら時代の変化のなかで持続していくが，本そのものは棚にしまいこまれてしまっていた．矢内原伊作訳の，黄ばんだ新潮文庫である．

大きな岩を山の頂まで苦心して運び上げる，すると，岩はまた落ちてゆき，落ちていった岩を再び山頂へと運び，それを無限に繰り返しているという，あのシジフォスの物語がこの評論の軸になっている．

この男の無限の空しい努力については，オデユッセウスの冥界行に書かれている．呉　茂一訳『オデュッセイアー』(岩波文庫)，第十一書のその文をまず引用する．

「両手でもって，とても巨きな岩を上げていく，それがいかさま，両手に両足ともその男が踏ん張りまして，巌(いわお)を上へと，頂上めがけて，いく度となく押しあげるが，いましも天頂(てっぺん)をさあ越そうというと，そのとき定(きま)って頑固な力が押し返してよこすもので，またもや下へと，耻知らずな石は転がり落ちるのです，するとも一度，一所懸命に押しあげていくその手足からは，汗がしきりに流れて落ち，頭からは塵埃(ちりほこり)が立つ有様でした.」

シジフォスはコリントスの創立者で,『イリアス』のなかでは,「人間のうち最も賢い男」とされている．その男がどのような罪を犯したのか，ホメロスは語っていないが，別の伝説がそれぞれに，神にたいして彼の犯した罪について述べている．

とまれ，神に逆らう人間に与えたれたこの刑罰を受ける男のなかに，カミユは「不条理の英雄」を見る．シジフォスは「その苦悩によってと同じく情熱

によって不条理の英雄」であると．彼の「苦悩」は分かる．この果てしない，無意味の反復であるがゆえに刑罰となりえているはずの労苦を繰り返す男の，「情熱」とは何であろうか．

「不条理性が認識されるや，不条理性はすべての熱情の中で最も激しく心を引き裂く熱情となる」といった逆説的な言葉の切れ端が心にしみこんでいた私だが，再び読むカミユの文においては，むしろ，次のような身体的な描写に惹かれる．「神話は想像力が生命を吹きこまなければならないものなのだ」として，カミユは，再び巨大な石をよじのぼらせようとするシジフォスの，その身体の緊張，石に押しあてられる顔を，作家の想像力をもって描く．

「われわれには，ひきつった顔，石に押しあてられた頬，粘土に覆われた塊を支える肩やその魂をうけとめる足の支え，手の先での把握，泥まみれになった二つの手の全く人間的な確かさ，が見えるのだ．」

この現代作家の文を読むと，ホメロスの描写の具体性とおおらかさが逆に感じられるのだが，そういう比較はここではせず，カミユの文に向かいあう．

「ひきつった顔，石に押しあてられた頬」というふうな，近代的心理主義的な描写のなかから，シジフォスにとっては「無益で希望のない労働」の直接的な対象である巨大な石と自己が一体となっていく様へと，作家の想像は突きすすんでゆく．「塊」は，それを支える「肩」をへて，いまや「魂」となって，それを足が支える．塊をつかむ手の先の感触が感じられ，そのような細部における身体的な反応，対象にたいする身体的な一体化への深まりが，表現されるのである．

岩を頂へと持ち上げてゆくその労働の姿と，たどりついたとたん岩が転がり落ちてゆく徒労の光景に，たいていの物語が集中している．また，シジフォスの労苦の空しさはそのイメージに結びついている．

しかしカミユは，岩が転がり落ちて，岩という労苦の対象が自分のそばから離れていったあとの場面に集中していくのである．全身が岩とひとつになっていく細部描写に没入した読み手には，この岩がシジフォスのもとからゆっくりと転げ落ちていったあとの，彼の身体が感じるであろう空白感が，予感されてくる．そのような空しく広がりゆく感覚を受けとめるように，カミユは，この労苦がなされているのは無限の空間と永遠の時間のなかであると想像し，次のように描く．

「到りつく天をもたぬ空間と終るべき時をもたぬ時間との中で行なわれるこの長い努力の果に，目的が達せられる．すると早くも石が忽ちの中に下界へと転がり落ちてゆくのをシジフォスは見るのだ．」

石が転がるのを見た男は，再び石を頂上へと持ち上げるべく山を下る．彼のもとにいまは彼の苦悩のもとでもある岩はない．山を下るあいだの，つまり「休止」のあいだのシジフォスに，カミユはまなこを凝らす．

「疲れきってかくも石に近づいている顔はもはや石そのものだ！」と．石との一体化は転がっていった石に再び向かってゆく男の顔において成就する．

顔に疲労の色が濃くあらわれているが，終わりのない「苦悩」に向かって再び下ってゆく，この時を，カミユは「いわば呼吸作用のようなこの時間」と呼ぶ．身体的な表現である．自己のこのような運命を，自己を囲む空気のなかで吸いこみ，この空気を呼吸することで，生きていることを実感する時間である．しかもこの時間は，ひたすらに岩を運び上げたあとに，「シジフォスの不幸と同じ確実さをもって戻ってくる」時間なのである．深々と，おのれをとりまく空気を吸う，呼吸作用のような時間を，カミユは「意識の時間」ととらえる．その呼吸のなかで自己の運命を意識しつつ，彼は，「各瞬間毎に自分の運命に打克つのだ．彼はその岩よりも強いのである」と．

渾身の力をこめてなされる営為の空しさを「意識」するのは，岩に身を押しつけているときではなく，空白のなかで山を下ってゆくときなのである．

この「意識」に，カミユはシジフォスの神話の悲劇性を見る．「自分の悲惨な条件の全貌を知っている」ことが彼の悲劇であると考える．彼の置かれた状況そのものではなく，状況を意識するかしないかということに悲劇を見る．

自己の運命を意識したときに悲劇が始まるというのは，古代ギリシア悲劇以来の伝統である．カミユは今日の労働者についても，「その生涯の毎日毎日を同じ仕事に従事」する彼らの運命を，「シジフォスに劣らず不条理」とみなす．しかし今日の労働者が悲劇的となるのは「意識のめざめた稀な瞬間に於いてのみである」と言い，シジフォスを「神々のプロレタリア」と呼ぶ．「自分の悲惨な条件の全貌を知っている」プロレタリアであると．そして「彼を苦しめたに違いない明視が同時に彼の勝利を完きものとするのだ」と捉える．なぜなら，「侮辱することによって克服されない運命はないのである」から．

下山のこの過程は，岩のところに帰ってくるときまで続く．自分の運命の意識は，苦痛であると同時

に運命の克服を意味し，かつ，それゆえに苦痛は喜びへと転換する．下山は「また喜びの中でもなされ得るのである．これは言いすぎではない」と．認識のなかに生じる苦痛・苦悩と，歓喜との，ニーチェ的な一体．苦痛・歓喜のあまり心にわいてくるのは，「悲哀」である．注目すべきは，認識の高まりは彼が岩に立帰る瞬間に頂点に達することである．

彼は再び，岩のもとに来る．「苦痛は既にはじまろうとしているのだ.」苦痛は岩を押し上げてゆくときの大地と結びついている．苦痛はまた喜びである．「この大地の姿があまりにも強く記憶に結びついている時，幸福の呼びかけがあまりにも激しく行われる時，悲哀が人間の心の中に身をもたげてくるようになる．これが岩の勝利であり，これが岩そのものなのだ.」いまやすべてが一体となる．

「シジフォスの運命はシジフォスに属するのだ．シジフォスの岩はシジフォスのものなのだ.」「人にはそれぞれの運命があるとしても，人間を超えた運命というものはないのだ．すくなくともそういう運命は一つしかないのであり，その運命は避け難いものであり且つ軽蔑すべきものだと人間は判断するのである．それ以外の運命については，人間は自分が自分の日々の主人公であることを知っている.」

「人間がその生に立帰るこの微妙な瞬間に，その岩へと立帰ったシジフォスは軽やかに岩をめぐって再び山の方に向き変りながら，繋ぐもののないこの行為の連続を凝視する．この行為の連続が彼の運命となるのであり，この運命は彼によって創り出され，彼の記憶の眼差の下に一つとなり，やがて彼の死によって封印されるものである.」

まさに，「人間のものはすべて人間に淵源するのだということ」になる．そのように，カミュは描く．

「本当に重大な哲学の問題は一つしかない．それは自殺である．人生が生きるに値するか否かを判断すること，これこそ哲学の根本問題に答えることである.」これは，この本の最初の章，「不条理の推論」の冒頭の文であり，かつてこの文庫を開いたときに，真っ先に目にとびこんできた文章である．この不条理の世界において，「生きるに値するか否かを判断する」のは，他の誰でもない，人間自身である．「人間のものはすべて人間に淵源する」という確信に立つかぎり，判断は，人間がくだすのである．カミュは個人の内部へと存在の源を求めて沈潜する．

生の不条理において，生きるに値するか否か，つまりあれかこれかの決定の前に立った者の陥るのは，回避である．カミュは「致命的な回避」という語を用いる．「致命的な回避」とは，「希望」である．「死後の生への希望」，すなわち「人生を超え人生を純化する何か或る偉大な観念」のために生きる人々の「欺瞞」が，「人生に意味を与え，人生の真の姿を損なっている」ことを指摘する．

カミュは問う，「生存の不条理性は希望により或いは自殺によって人がそこから逃れることを要求するであろうか」と．「〈不条理〉は死を命ずるか」と．このように問うカミュは，シジフォスのあの苦痛と歓喜の姿を想像するのであった．

空しく苛酷な労苦そのものではなくて，その全貌を「意識」することのなかに悲劇性を見るということ，すなわち，すべてを自己の内面へと集中させていくこと，「人間のものはすべて人間に淵源するのだということ」の確信．それは，エマニュエル・レヴィナスの「キルケゴール／実存と倫理」(1963；合田正人訳）の言葉を用いれば，

「人間的主体ならびにそれが開く内面性の次元を，絶対的なものとして，分離されたものとして，客観的〈存在〉の手前に位置するものとして維持すること」へと，「主体の還元不能な位置」の擁護へと通じる．

生存の不条理に向かい合い，それを敢然と引き受けたシジフォスにおいては，岩はすでに彼自身であり，運び上げた岩が再び転がりゆくとき，自己の一部が彼のもとを離れていった思いであったかもしれぬ．本来は苦痛の源ともいうべき岩に再び近づく彼の顔には，自己が岩と一体であることの表情が浮かび出る．そして彼の営為は繰り返されてゆくのである．

再び取り出した『シジフォスの神話』(1942) を読む私は，生の不条理においてのこの悲劇的な，しかしその空しい労苦の対象へと自己を結びつけてゆく，空しさのなかのその手応えを叙述に感じた．そういう感じをいだくときに，自然のことのように，「特性のない男」を思い浮べるのだった．ローベルト・ムージルの未完の長編『特性のない男』［注］の主人公である．

小説の舞台はウィーン，ムージルの造語で「カカーニエン」という国の首都である．キルケゴール的な「あれかこれか」を頭に置いて，まず言うなら．この国の性格は，「一切のあれかこれか (Entweder-Oder) に対する深い不信」に根ざしているのである．

その統治原理は「あれでもありこれでもある(Sowohl-Als-auch)」であり，しかもそれは，あれでもなくこれでもなく（Weder-noch）によって賢明に和らげられていた」，というのである．「あれでもありこれでもある」の多様なるものの併存の姿は，積極的な形で何ものかを行い生むことへとつながらず，「あれでもなくこれでもなく」のすべてに付された否定によって裏側から動きは停止させられ，水の淀むような停滞の雰囲気をかもしだすのである．主体性の内的なダイナミズムとは対極にあるように見える，静的な風景がこの小説に描かれる．

時代遅れの古い都の静止の雰囲気のなかで，実はまた，きわめて現代的なものが描かれる．この不思議な二重性が，小説の特徴であり，古都ウィーンにしても，ウイーンであるが，同時にウイーン以外の現代のどこの都市でもあるという無名性をおびて描かれる．そうしてまた小説の初めにおいて，現代都市の，主体性など解消してしまう，せわしない喧騒の様相が冷ややかな眼で観察される．じっと眺めているのは，特性のない男である．彼は，住居の窓際に立ち，庭の向こうの，どれだけ離れているかはわからぬが，向こうの，都市の目まぐるしい動きを，時計を手にして観察している．小説はそういう姿で，主人公を登場させるのである．

カミユのいう「その生涯の毎日毎日を同じ仕事に従事」しつつ，その不条理をおそらくは意識してはいないであろう人々の営為が，無機的な空気のなかで見られている．そのような無名の，激しく通り過ぎてゆく集団の「活力にみちたエネルギー」を，計量できぬかと，特性のない男は試みている．そしてその不可能を感じる．この現代都市のなかで刻々と消費される注意力の総体が，もし計量しうるなら，それとくらべると，「アトラスが地球を支えるために使う力」も「微量なもの」となるであろうと．「現代では何もしていない人間でさえ，巨大な仕事をやっているのが測定できよう」と，特性なき男は特性なき時代の，たいていは意味なく充満しているエネルギーについて考えるのである．

「特性のない男」．ドイツ語では，der Mann ohne Eigenschaften，英語では，the man without qualities．特性がないということはどういうことか．

ドイツ語のEigenschaftの辞書での意味，「ある人・事物に属し，その人・それを特色づけるもの」，「固有の性質，特質，属性」などと訳され，「職務上の特性」の意味で「身分，資格」という訳も加わってくる．まずそのことから浮かぶイメージは，ある人種や国民の特性など．個人については，その人の，職業，地位，経歴，その人を特色づける世界観・生活の姿勢・行動の仕方，ということであるが．

第一巻第二部，39章「特性のない男は男のない特性で構成されているということ」のなかに次の箇所があり，これが「特性のない」ということを直接扱う文となり，したがってまた幾度も引用されてきた．すなわち，

「これに反して今日では，責任の重心が人間の中にあるのではなく，事物関係の中にある．体験が人間から独立したことに，人は気づかなかったのだろうか．」

「特性のない」ということを，責任ということを軸に語っているのが面白い．責任の重心が人間からなくなったということ．「人間」という言葉は，一般的に人間を指してもいるが，「個人の責任という快適な重味」と書いてあるので，個人のそれである．そもそも責任は，責任を負う主体・限定された人・個たるものと結びついてあるはずで，「人間」と書いてあるからといって，「一般的に人間を指してもいる」などとまず記した私のほうがおかしい．しかし，ムージルの文は，ふっとそういう一般化へと気持が向いていくようなところをもっているのである．責任の所在を一般化すれば，範囲拡大とともに責任の負い方も曖昧さをおびてくる．そのような曖昧さがすでにムージルの文には含まれている．しかも責任そのものではなくて，「責任の重心」が人間のなかから別のところへ，事物関係のなかに移ってしまったと言っている．カミユにおいて重要な意味をもつ，人間的主体ならびにその内面性，という事柄が，ここではもうすでに抜け落ちていて，抜け落ちたところから書かれている．

人間が自分の責任を負わない，いいかげんな存在になったというなら，倫理感の欠如など，その人間の主体的な態度を問うということになるのだが，ムージルはそういうふうには事をおしすすめない．

「体験が人間から独立したことに，人はきづかなかったのだろうか」と書く．責任に対して，いきなり「体験」が対応する．唐突なのである．この種の唐突さはこの小説のいたるところで出会う．責任ということが，責任の所在とか，責任の自覚やその負い方の問題とは異なるところで受けとめられて，ちょっと違った考え方をさせられていく．小説はこのような段差を段差としてとりたてて問題にすることなく，そのまま文を進めていくのであるが，読み手

は事柄のつながりを追い求めていかなければならない．そもそも，事柄を順序だてて説明するということの不可能を感じながら，しかも全体を表現しようとしている小説であるから，そうした読み手の解釈がそのつど要求される．

さて，体験が人間から独立したとはどういうことか．自分の体験がいつのまにか自分の体験ではないようになってしまっていること，何を行なっても，何を感じても，行なったことや感じたことが，その人に定着しない．何かを体験していながら，なにか他人事のように，自分から遊離して感じられる．あとに出てくる言葉を用いると，体験は，「宙に浮いたもの」となっているのに，人はこれまで気づかなかったのか，と言うのである．そして，

「今日のように，じつに多くの人たちが容喙（ようかい）して，怒っている当人以上にその怒りについてよく知っている場合，自分の怒りが事実ほんとうに自分の怒りだといいうる人がいるだろうか？！」と．

つまり怒っている．怒っているが，ほんとにそれが自分の怒りなのだろうか，自分はそもそもこんなに激しく怒れる人間だったのか，あるいは，こういう怒りは昔どこかで読んだ本のなかにもあったような気もする，などといった，怒りとの距離を示す感情が同時に自分のなかにある．怒りという最も激しい，心の底からの感情について，そういうかすかな違和感がある．ところが，いまや，怒りについては，心理学とか社会学などをもとに，いろいろと研究もされていて，怒っている本人以上に知られていて，その人の怒りも，いつのまにやら意味づけされ，分類されて，怒りの体系におさめられ，個人的体験は彼のもとを離れて，無名の怒りとなっていて，しかもなおそれは彼の怒りであるとされる．

諸々の体験がその人間に定着せず，離れてゆく．個人として自分のなしたことも，何だか自分でやったという実感がしない．自分の行為がほんとうに自分のものには思えないところにおいて，責任の意識が芽生えるであろうか．

しかし，怒りということについてはきちんと知られていて，これが君の怒りだと言われる，それと同じように，責任については，社会的に規則できまっていて，君はこれこれのことをしたのだから，君はこのように責任をとるべきだと言われる．社会のシステムとしては，責任についてもちゃんと，一応，機能している．しかし，それが個人の良心という問題とからめて，個人の責任として個人に受けとめられているかどうかは，システムはおそらく感知せず，事の定めれた分析・判断にしたがい，ある人・人々に責任を課し，それでその件は片づけられる．責任という形はあるが，その人の内面から遊離してそこに存在している．責任の重心は人間のもとからすでに離れてしまっている．そして事柄，あるいは事柄と事柄の関係に移っている．ある組織とか機構としては責任をとったことになっている．

しかし，重心が事物どうしの関係に移っているということは，怖いことである．最も大切なことが人間の及ばぬところで行なわれるということでもある．そこのところは，このムージルの文はくどく書いていないが，今日，このことのほうが恐ろしく思われる．それというのも，人間がなすことについて人間自身がもはや手応えを感じないような状況のなかに入っているからである．

ヘルマン・ブロッホは，十九世紀末のウィーンにウィーン独特の「価値真空」の状態を見た．しかし彼は続けて言う．本当は，人間は価値真空には耐えられないものであり，「代用の価値」を無意識にも求め，むしろ，「代用」のほうに満足するということを．すなわち体験が自己からなくなった人間，孤独な人間は，体験を，つまりは，「代用の」体験を求めて，劇場へ行くのである．ムージルは書く，「体験は劇場に移ってしまった」と．あるいはまた「何か特別な体験を育成する思想団体や宗教団体の中へ，移ってしまった」と．

他の体験は切り捨ててある種の体験だけを特別に育成する，つまり人間をある局面にのみ集中させるところの様々の団体が，空虚を覚える人々を引き付ける．整理され，他によって意味づけされる体験．それはすべて「代用」体験であり，体験そのものが人間から独立してしまったのである．

こうして自己の体験も，自己の特性も，その他諸々の事物が，人間から遊離していって，人間のまわりに浮遊している．事物は事物どうしの間で関係をもつようになってしまっている．「男のいない特性の世界が，つまり人間を抜きにした特性の世界が，体験するもののいない体験の世界が，出現したのである.」

興味深いのは，ムージルはこの特性のない世界を悲観的なタッチで描いていないということである．「これを見ると，理想的状況下では人間はもう個人的には何も体験しなくなり，そして個人の責任という快適な重味は，考えうるかぎりのさまざまな意味の公式体系の中に解消しかねない有様である」と．

「理想的状況下では」と，ムージルは書く．つまり事柄はもっと推し進められられるべきであると考えられているのである．それはなぜか．長いあいだ人間のなかにあったある態度の必然の解体であると捉えられているからである．

「すでに数世紀以来消えつつあったが，長いあいだ人間を宇宙の中心とみなしてきた人間中心的態度のこの解体は，ついに自我そのものにまで及んだらしい」と．

なぜそうなったのか．また，それでは，そうなるまでは，人間は宇宙の中心として自己のなす体験をそのつどしっかと自己に結びつけその意味を自己に感じていたというのであろうか．そのあたりについてのムージルの文はまた困惑させずにはおかない．

「なぜなら，体験においては，それを体験することが最も重要であり，行為においては，それを行なうことが最も重要だという信仰が，大抵の人には単純（Naivität）だと思われ始めているからだ．」

「体験においては，それを体験することが最も重要だという信仰（der Glaube）」．つまり体験がその人に定着していた時代というのは，事実として定着していたのではなく，そう信じられていた時代のことである．

そうして大抵の体験は，あのシジフォスのそれのように苦難の体験であり，自己の責任において自己の内面とかかわりつつ生じたものというより，不条理にも彼に降りかかってきたものであったであろう．ヘシオドスの『仕事と日』の言葉を用いれば，「病苦は昼となく夜となく，人間に災厄を運んで，勝手に襲ってくる，ただし声は立てぬ」のである．無言の災厄の到来，自己とは無関係に襲ってくるもの，それでも，「それを体験することが最も重要だという信仰」が生きていた，ということなのか．個人のものではないがゆえに，個々人にはそれを体験することが最も重要であったのではないか．

「これに反して今日では，責任の重心が人間の中にあるのではなく」，という文から，特性のないことについて考え始めた．「これに反して今日では」，すなわち，今日の前はどうであったのか．「責任の重心が人間の中にある」状態とはどういう状態なのか．人間がしっかり，堂々と生きていた，というのか．現代文明社会の人間のあり方を批判する人たちのなかには，昔の人間が，いかに立派であったかということを強調する者も多いのであるが．そこをムージルはどう描いているのであろうか．

「昔の人は，現代人よりも良心に恥じることなく個人でいられた」，と書かれている．一人一人良心に恥じることなく個人でありえた時代とは．

「昔の人は畑の麦の穂に似ていた．彼らは，神，雹，火事，黒死病，戦争で今日より激しく揺すぶられただろうが，それは全般的には，都市なら都市，田舎なら田舎というふうに，畑として揺さぶられたのである．」

人々は共同体のなかにいて，そこにそれぞれが位置していて，苦難の体験はそのなかにおいて，「畑として揺さぶられ」つつ体験されていた．それが個人のあり方に関係してくるのである．

エーリヒ・フロムの『自由からの逃走』の文を引用すると，「近代的な意味での自由はなかったが，中世の人間は孤独ではなく，孤立してはいなかった．生まれたときからすでに明確な固定した地位をもち，人間は全体の構造のなかに根をおろしていた．こうして，人生の意味は疑う余地のない，また疑う必要のないものであった．人間はその社会的役割と一致していた．」（Escape from Freedom 1941・日高六郎訳，創元新社）

E. フロム：「近代的な意味での個人主義は存在しなかったが，実生活における具体的な個人主義は大いに存在していた．」

ムージル：「そしてそのほかにまだ個人の動きとして，個々の茎のために残されたものは，容易に責任を負うことのできる明確に限定されたものだった．」

当時，「明確に限定された」こと（eine klar abgegrenzte Sache）は，諸々の事において，今日とは異なる状況のなかで見られた．すなわち，「五百年程昔の世界では，人生のすべての出来事は今より遥かに鋭い輪郭を持っていた」のである．ヨハン・ホイジンガの『中世の秋』（1919年，兼岩正夫・里見元一郎訳，創文社）の第一章「生活の緊張」の冒頭の文である．

「悲哀と喜悦，不幸と幸福の間の懸隔も我々の場合よりずっと大きかったらしい．彼等が体験したすべてのことは，子供の感ずる喜びや悲しみに今でも僅かに残っている様な直截性と排他性を持っていた．」

病気と健康との違いは，今日想像できぬくらい厳しいものであったろう．「酷寒と恐ろしい暗黒の夜は，まさに禍いそのものだった．名誉と富はより熱烈に，より貪欲に享受された．そしてこれらは悲惨な窮乏とその堕地獄世界から，今より遥かに厳しく区別さ

れていた.」

そして物事が，物事の対照が現在よりずっと際立っていた．光と闇，昼と夜，静寂と騒音，健康と病気，生と死，都市と田園.「あらゆるものが永遠の対照，多彩な形式という印象を与えたが，そこから，ある魅力が日常生活の中に醸し出される．この情熱的暗示は時に野放図な有天頂に，時に残忍極まる冷酷無情に，時に魂の底からの敬虔な感動に変化して姿を現わすのだ.」（以上,『中世の秋』より）

そのなかで，つまり，昼が終われば夜になり，闇となり，病気になるということは死ぬことを意味するなかで，自己のなした事を，運命としてにせよ，自分で負うしかなく，しかしそれにより，彼なりに，人生の輪を，無名のなかで自分なりの円環を閉じて，この現世を去ってゆく．

時代は一直線に今日のような状態へと向かったわけではない．いくどかの精神の昂揚，変革の試みが時代を覆うこともあった．ゆるやかな下降のなかで，ちょっとした燃え上がりもしばしばあるのだった．そしてそのつど共同体的なものはくずれていくのだった．

例えば時代的にもっと近くの，ウルリヒも生まれていた頃のことだが,「十九世紀最後の20年間の油をひいたような平板な精神界から，突如ヨーロッパ全土に，燃え立つばかりの熱狂が巻き起こった．何が起こっているのか，誰にもはっきりとはわからなかった.」さまざまの現象が現われた.「みなが一緒に息づいていた．もしこの時代を分析すれば，木製の鉄でできた四角い丸，とでもいうようなたわけたもの」が生まれて，しかもそれでいて「すべてが融け合って，ほのかに輝く一つの意味を形成して」いた．しかし，この旋風がおさまっていく.「乱れた脈拍が次第に活気を失っていく全般的な一種の凪（なぎ）の状態」に入っていく．では一般生活が行き詰まったのだろうか．いや，経済の営為・人の現実的活力は，見るところ,「むしろ強くなった」．政治家も奇妙に活気づいて，文化や芸術に明るいことを示したがる．

では，何が失われたのだろうか．なくなったのは,「秤では量れないもの」である，とムージルは言う．「予兆（ein Vorzeichen）」とか,「幻想（eine Illusion）」という，漠としているが，混沌のなかにあってそれぞれ人間に全体としてある何かの到来を感じさせ，ある方向へと促したりする予兆・幻想が，失われた．それはちょうど，これまで全体を引きつけ，ひとつの塊にしていた磁石の磁力がふいに消えたようなもので,「磁石が鉄屑を放し，そして鉄屑が元のごたごたに戻るときのような」状態に入った.「すべての関係が少しずつずれたのだ.」（以上,「精神の革命」と「ある不思議な時代病」の章をもとに記す）

特性のない男，すなわち「自分はあらゆる特性の近くにいると同様にそれから遠く離れているということ，そしてそれらの特性が彼のものになっていようといまいと，奇妙なことにどれも彼には興味がない」ということを知っている男，否，正確に言うと，自分についてはそのことだけしか知らない男，そのような男を主人公とする小説の舞台は，第一次世界大戦前夜のウィーンである．しかし作者ムージルは，オーストリア・ハンガリー帝国の首都ウィーンを舞台としていながら，ウィーン以外の都市でもありうるという形で，ウィーンを描く．特性のない，交換可能な場として，小説の場が設定される.「この国の息吹にかかっては，事実も運命の打撃も，まるで綿毛や観念のように軽いものになって」しまう，そのような事柄が起きても現実として定着せぬまま，あっというまに過去のものとなり，あいまいに，眼前から見えなくなり，そしておそらくは，消えたように見えても，過去はどこか，古都の暗闇にひそんで，いつでも現在にとってかわって姿を現わすかもしれない．そういう不思議をムージルは巧みに描く．

1913年，下降の時代において，国の支配階級は彼らなりに憂慮し集まって，一大愛国運動を起こそうとしていた．筋らしい筋のないこの小説のなかで唯一筋らしい，この架空の運動は,「平行運動」と呼ばれる．1918年は，ドイツ帝国で皇帝ヴィルヘルム二世の即位30年にあたるところから，5年後をめざしかの地ではこれを記念する盛大な祝典が企画されつつあるが，この年はまさにオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世即位70周年にあたるわけで，伝統ある帝国の国威を示すために，ドイツと平行して，これと対抗しつつ，大祝典を計画するというところから「平行運動」と呼ばれる．この運動を国民の道徳的回復と愛国的感情の復活のためにすべきだと考えられ，それにふさわしい「大いなる理念」が探しもとめられる．

この没落の道をたどる大帝国の高級貴族，高級官僚の夫人，はてはドイツから来た大企業の経営者が中心となり,「財産と教養」なる原則のもと大学・芸術・産業・慈善団体などの代表者が招待され，仰々しくも大会議を催すのだが，運動の軸となるべき「大いなる理念」は見つからない．全般的に焦燥は深

まり，彼ら特性をもつと思っている者たちに，さまざまの変化が現われてくる．魂の苦悩から，貞節な夫人が性的なものへとのめりこむというふうに，いくつかの形で，憂鬱，妄想，神経症的現象があらわになる．何も起こらない日々，何かがなされなければならないと思いながら，何をなすべきかが分からない．しかし，何をなすべきかが分からぬにしても，何かがなされなければならない，何かが起こらなければならない，という形で，焦燥は深まってゆく．

特性のない男ウルリヒも，この運動にかかわることとなり，さまざまの人物に接する．「あらゆる特性の近くにいると同様にそれから遠く離れて」いて，しかもそれらの特性に対しては「奇妙なことにどれも興味がない」この男は，可能性の感覚の持ち主でもある．つまり，「現実に存在するものと同様に現実に存在しうるはずのあらゆるものを考える能力，あるいは現実にあるものを現実にないものよりも重大視しない能力」をもつ男で，こういう現実の枠をいつでも越えてゆき，既成の枠を平然と無視する男は，それら特性あると思いこんでいる人物らに奇妙な影響を及ぼす．彼はとらわれない，不安のなかで自由である．では，この男の思考は恣意的であるのかというと，けっしてそうではなく，大きなところで規定されているのが感じられる．時代の状況を見えぬところで背負っている彼はその閉塞を切実な形で受けている．それが数学者としての彼の厳密な思考にも作用していることは否めない．解体した，ばらばらになったこの生のすべてを受けとめつつ厳密に考えていこうとしているのであるが，その思考の滞る様を，ムージルは独特の比喩を用いつつ描いており，その何程かは，すでにこの研究誌に何回か掲載した文に表わした．ここでは，特性のない男の思考の一例，すなわち解体せる生の全体へと目を向け，道徳の問題をそのなかで考える主人公の態度を独特の形で表わす一場面を，すなわち小説ではまだ始まったばかりの第七章のなかの，殴り合いの翌朝のウルリヒの思考の場合を，ここに紹介しておこう．

彼は三十二歳，もう少し前の彼ならあのときもっと素早く反応し，巧妙に身体を動かして的確な打撃を与えつつ，屈強な三人の男の攻撃をまっこうから受けるようなことはなかったであろう．「この年になると，敵意を抱くにしても愛情を抱くにしても，昔より時間がかかる．」三人の男の姿をとって「大気中に充満している敵意が雷と稲妻となるために凝集して」くるのを感じ，対応するには，「あまり多く考えすぎたようだ」．

つまり夜の街路で彼の前に立った三人の男に対して，最初の一撃を与えて機先を制したものの，背後からの打撃で膝をついて，意識を失った．その翌朝，自分の失策を考えながら，彼の思考は，敵意と暴力のみちる社会，その一方で，教会・病院など様々の人間的配慮を施しているこの社会について考える．

「世間周知の人生の矛盾，人生の一貫性のなさ」の問題について彼は考える．そしてムージルは次のように書く．「人はこの問題に微笑を浮かべたり，溜息をついたりする．だがウルリヒはそうではなかった」と．

「若い甥の粗暴な言動に対してオールドミスの叔母がみせるような，人生の矛盾や人生の一貫性のなさ（Halbheiten）を甘受する人生態度に見られる，こうしたあきらめと猫かわいがりとが混合した態度を，彼は憎悪した．」

ここまでは，特性のない男の，「あきらめ Verzicht」・妥協に対する憎悪，彼の一貫性への欲求が，読み手にも納得しうる形で表現されている．しかし特性がないことを意識しつつ，全体をなお求める者の独特さは，次の文に現われてくる．

「彼は，ベッドにこうしてとどまることが，人類の諸事万般に見られる無秩序から利益を引き出すことになるとはわかっていたが，それでもすぐにベッドからとび起きることだけはしなかった．というのも，全体の秩序のために努力する代わりに，自分だけ悪いことを避けて善いことをするならば，それはいろいろな意味で問題を無視して良心と性急に妥協することとなり，短絡的であり，また個人的なものに逃避することにもなるからだ．」

彼は，ベッドから起きることはしない．この非行為・非関与．

人生の矛盾を感じて即刻とび起きることは，つまり，「自分だけ悪いことを避けて善いことをする」ことであり，「問題を無視して（auf Kosten der Sache 事柄を犠牲にして）良心と性急に妥協することとなり，短絡的であり，また個人的なものに逃避すること（ein Ausweichen ins Private）」へ通じる，という認識を手放さない男．

「重要なのは，この原因と秘密のからくりを認識することである！　これこそ，古臭くなってゆく原則に盲従して善人たらんとすることよりも，いっそう重要なことだろう．それゆえウルリヒは，道徳のことでは，善行を日々行なうヒロイズムよりは，む

しろ参謀部勤務に心を惹かれた.」

認識と行動，思考と行動．時代は，行動を求めていたし，いまも求めている．認識に沈潜する者のいやらしさ，非行動の意気地なさが，いくど指摘されたことか．認識は行動へ通じるべきだと．

特性のない男は，矛盾を感じる．誰よりも鋭敏に，独特の感度をもって，感じる，が，ベッドからとび起きることはしない．

しかし彼は「あきらめ」ない，のである．彼は断念・諦観を「憎悪」する．軽蔑ではない．憎悪する．ということは，諦観は，いつも彼のすぐかたわらにあったからである．ベッドから起きて，何かをして，己れの小さな良心をそのときなだめて，そのときだけ事を片づけ，うまく片づければなおさら，片づけられなくとも，なにほどかの心のやすぎをやがて受け入れ，再びベッドに入る者のようには，ベッドから起きることはしない．

ある途方もない曖昧さが，生の解体をわが身に感じつつ，生の全体について根本的に厳密に思考する男をつつんでいるように思われる．

その曖昧さは，彼がおそらくは時代の状況という曖昧なるものによってどこかで規定され拘束されていることを暗示しているのではないか，と思われるのである．時に何かを彼方に予感しつつ日々に行なわれる思考は独特の停滞を見せる．とどこおることが彼の思考でもある．あの平行運動において大いなる理念を探して焦燥のうちにいる者たちのかたわらで，彼においても,「静かな絶望」が嵩をましてゆく．だがそのとき，ある途方もない曖昧さ・何とも言いがたい空白が，特性のない男の忍耐の源となってもいるようである．「魚のいない川に網を沈めた漁師のあの絶望的な不屈さをもって生きつつ待った」という比喩的表現をもって，ムージルは，そのようなときの，主人公の姿をあらわすのである．

(1998.3.7)

【注】

1) Robert Musil (1880-1942)：Der Mann ohne Eigenschaften. 1930年第1巻，32年第2巻第1部刊行．ムージルは亡命の地スイスにおいて，およそ出版の見込みなどありそうもない状況においてこの壮大な逆説にみちた小説を書き続け，そして彼の死により厖大な量の遺稿が残される．死後十年をへて，1952年にAdolf Friséにより遺稿が整理され全編刊行．78年大幅な改訂がなされる．

2) a)『特性のない男』全4巻（1965，河出書房）．b)『特性のない男』全6巻（1966，新潮社）．（両方とも今日，絶版）．
河出書房の訳にたずさわった加藤二郎氏により，松籟社から個人全訳が刊行．1995年に全6巻完成．本論はこの加藤氏の訳をもとにした．

3)『特性のない男』については，この『横浜経営研究』には1981年より87年まで四回にわたって拙論を掲載したが，以後，研究ノートや随想を書いていて，この小説をテーマとしての論文は途絶えている．

〔ふじい　ただし　横浜国立大学名誉教授〕